

図書館に勤めた文学者人名録

滝沢 正順 (東京大学工学部機械系図書室)

図書館や図書館員のことが、一般の(あるいは図書館以外の分野の)新聞や本・雑誌にのることが時々あります。そうしたなかで気のついたものを、図書館に勤めるようになってから集めるようにしていたのですが、実際には趣味で読んだり目を通したりすることの多かった文学関係のものがすこし集まっただけでした。それをまとめてみて、最初にできたものが、この人名録です。

凡例

1. この人名録は、次のいずれかの形で図書館と関わった文学者を集めてみたものです。

1. 図書館の職員として働いたことがあつたことがある。(アルバイトも含めます)。
2. 図書館長をしたことがある。
3. 図書館をつくつたことがある。

2. とりあげた文学者は次のどれかに該当している人です。

1. 人名辞典・文学史の類に名前か作品名の記載例がある。
2. 文学作品の叢書や合集に作品掲載の例がある。
3. 文学賞の受賞歴がある。

3. それぞれの人について、関わつた図書館名とその期間を、わかる範囲で記しました。確認しきれなかつたものについては、「詳細不詳」としたり、「？」をつけたりしてあります。

4. 日本の文学者については、生没年・出生地・最終学校名を、外国の文学者については、生没年と国名を、それぞれ参考のために記しました。

5. 「1. 文学に影響や関連のある人」として最初にあげた4人は、通常の意味では文学者とは言えないのかもしれませんが、文学

との結びつきがあるので記しました。

6. 各グループ内での配列は生年順です。

7. 記載内容の典拠については煩瑣になるので省略します。

8. この人名録は『東大図研報』第72~75号(東京大学班、1986年1~11月)に同じ題で(1)~(4)として載せたものです。追加を繰り返したので配列は並べ直しました。また、(3)の「番外篇・其一」「其二」は除いてあります。

9. この人名録のなかの吉野源三郎と会田雄次は東大農学部、谷村章子さんは東大農学部、椋鳩十は東大工学部の大浪美雪さんに、教えていただきました。

10. この人名録の最後の「IV. 図書館に勤めなかつた文学者」は、図書館に勤めたいとか、勤めるようすすめられたなどという例を、5件あげてみたものです。ただしどの場合も実際には勤めていません。

11. この人名録や記載内容についてお気づきの点がありましたら、お教えいただけるとさいわいです。

1. 文学に影響や関連のある人

1. ヤーコブ・グリム 1785~1863
ドイツ 言語学者

2. ヴィルヘルム・グリム 1786~1859
ドイツ 言語学者

(1・2、いわゆる「グリム兄弟」。
『童話集』)

ヴェストファーレン王(ジェローム・ボナバルト)の図書室

ヤーコブ 1808~1813

ヘッセン選帝公図書館(カッセル)

ヤーコブ 1816~1829

ヴィルヘルム 1814~1829

ゲッティンゲン大学図書館

ヤーコブ 1830~1837

ヴィルヘルム 1830~1837

3. 柳田国男 1875~1962 民俗学者
兵庫県生まれ 東大政治科卒
(宮崎湖処子編『抒情詩』(1897)所載
の詩を書いた)
内閣文庫の管理 1910~1914 (内閣
書記官室記録課長の時)
4. 毛沢東 1893~1976 中国 政治家
(『文芸講話』(1942)。詩の創作)
北京大学図書館 1918~1919

11. 日本の文学者

1. 湯浅半月(吉郎) 1858~1943
詩人・ハブライ学者 群馬県生まれ
同志社卒
京都大学図書館 1901~1902
京都府立図書館長 1904~1918
早稲田大学図書館顧問 1918~(1921?)
2. 市島春城(謙吉) 1860~1944 随筆家
新潟県生まれ 東京大学中退
早稲田大学図書館長 1902~1917
3. 森 鷗外 1862~1922 小説家
島根県生まれ 東大医学部卒
帝室博物館総長兼図書館頭 1917~1922
4. 姉崎嘲風(正治) 1873~1949
評論家・宗教学者 京都生まれ
東大哲学科卒
東京大学附属図書館長 1923~1934
5. 土岐善麿 1885~1980 歌人
東京生まれ 早大英文科卒
(司書資格取得、1951年の講習(東京
大学))
東京都立日比谷図書館長 1951~1955
日本図書館協会理事長 1951~1957
6. 木下杢太郎 1885~1945 詩人
静岡県生まれ 東大医学部卒
東京大学医学図書館長 (本名・太田
正雄)
7. 渥美清太郎 1892~1959 演劇評論家
東京生まれ 青山学院高等部卒(中
退?)
帝国図書館出納手 1907~1911
8. 葉山嘉樹 1894~1945 小説家
福岡県生まれ 早稲田大学高等予科
文科中退
明治専門学校(福岡県。現在、九州工
業大学) 応用化学科図書館
1919~1920
9. 江戸川乱歩 1894~1965 小説家
三重県生まれ 早大経済学科卒
市立図書館(東京?) 貸出係(アルバ
イト) 1915
10. 吉野源三郎 1899~1981 評論家・児童
文学者 東京生まれ 東大哲学科卒
東京大学図書館 1928~1931
11. 神西 清 1903~1957 小説家・翻訳家
東京生まれ 東京外語露語部文科卒
北海道大学図書館 1928~1929
12. 草野心平 1903~ 詩人
福島県生まれ 嶺南大学中退
嶺南大学(中国・広東。現在、中山大
学) 図書館でアルバイト(貸出し)
13. 島木健作 1903~1945 小説家 札幌市
生まれ 東北大学法学部選科中退
北海道大学図書館 1923~1924
14. 椋 鳩十 1905~ 小説家・児童文学者
長野県生まれ 法政大学国文科卒
鹿児島県立図書館長 1947~1966
15. 渋川 驥 1905~ 小説家
福岡県生まれ 東大倫理学科卒
東京大学図書館 1930~1946
国立国会図書館 1949~1963
武蔵大学図書館 (1963?)~1970
16. 木俣 修 1906~1983 歌人
滋賀県生まれ 東京高師文科卒
玉川学園教授兼図書館長 1943~1944
17. 石井桃子 1907~ 児童文学者
浦和市生まれ 日本女子大英文科卒

- 子供のための図書館「かつら文庫」を
自宅に創設・運営 1958～
18. 中村地平 1908～1963 小説家
宮崎県生まれ 東大美学科卒
宮崎県立図書館長 1947～1957
 19. 桂 信子 1914～ 俳人 大阪市生まれ
大阪府立大手前高女卒
神戸経済大学予科図書課 1944～1945
 20. 会田雄次 1916～ 歴史学者・評論家
京都生まれ 京大史学科卒
東京大学図書館
 21. 島尾敏雄 1917～1986 小説家
横浜市生まれ 九大東洋史卒
(司書資格取得、1958年の講習(熊本
商科大学))
鹿児島県立図書館奄美分館長
1958～1975
純心女子学園(鹿児島市)教授兼図書
館長 1975～(?)
 22. 滝口雅子 1918～ 詩人 朝鮮咸鏡北
道生まれ 京城第一公立高女卒
国立国会図書館 1950～1979
 23. 飯田龍太 1920～ 俳人
山梨県生まれ 国学院大国文科卒
山梨県立図書館 1951～1954
 24. 瀬戸内寂聴(晴美) 1922～ 小説家
徳島市生まれ 東京女子大國語卒
京都大学付属病院小児科図書室
1950～1951
 25. 大西民子 1924～ 歌人
盛岡市生まれ 奈良女高師卒
埼玉県立浦和図書館 1968～1979
埼玉県立久喜図書館 1979～1982
 26. 真継伸彦 1932～ 小説家
京都市生まれ 京大独文卒
専修大学図書館 1955～1959
 27. 阿刀田 高 1935～ 小説家
東京生まれ 早大仏文卒
国立国会図書館 (11年在職)

III. 外国の文学者

1. ジャコモ・カサノヴァ (イタリア)
1725～1798 回想録で知られる
ドゥックス城(城主ヴァルトシュタイ
ン伯爵、ボヘミア)図書館
1785～1798
2. G.E. レッシング (ドイツ) 1729～
1781 劇作家
ヴォルフエンビュッテル図書館(ブラ
ウンシュヴァイク公国) 1770～1781
3. レアンドロ・フェルナンデス・デ・モラ
ティン (スペイン) 1760～1828
劇作家
国立図書館 1808～1812
4. J.H. チェルグレン (スウェーデン)
1751～1795 詩人
詳細不詳
5. K.G. アヴ・レオボルド (スウェーデン)
1756～1829 詩人
詳細不詳
6. シャルル・ノディエ (フランス)
1780～1844 小説家
ドゥー県中央学校図書館(ブザンソン)
1798, 1801
ライバック図書館(ユーゴスラビア)
1812～1813
アルスナル図書館(パリ) 1824～1830
7. ヴィルヘルム・ミュラー (ドイツ)
1794～1827 詩人
デッサウの図書館
8. H.A. ヴェルゲラン (ノルウェー)
1808～1845 詩人
農民のための図書館をつくった。
9. アルフレッド・ド・ミュッセ (フラン
ス) 1810～1857 詩人・劇作家
内務省図書館 1838～1848
文部省図書館 1853～(1857?)
10. ジョゼ・マリア・ド・エレディア (フ
ランス) 1842～1905 詩人
アルスナル図書館(パリ)

11. アナトール・フランス (フランス)
1844~1924 小説家
上院図書館 1876~(1890?)
12. アウグスト・ストリンドベリー (スウェーデン) 1849~1912 小説家・劇作家
スウェーデン王立図書館(ストックホルム) 1874~1882
13. ミハイル・エミネスク (ルーマニア) 1850~1889 詩人
詳細不詳
14. ステファン・ジェロムスキ (ポーランド) 1864~1925 小説家
ポーランド国民図書館(チューリッヒ) 1892~1896
ザモイスキ図書館(ワルシャワ) 7年間
15. ローベルト・ヴァルザー (スイス) 1878~1956 小説家
国立ベルン図書館 1921
16. ローベルト・ムージル (オーストリア) 1880~1942 小説家
ウィーン工業大学図書館 1911~1914
17. マリアン・ムーア (アメリカ) 1887~1972 詩人
ニューヨーク公立図書館 1921~1925
18. ジークフリート・ラング (スイス) 1887~1970 詩人
詳細不詳
19. ジョルジュ・バタイユ (フランス) 1897~1962 小説家・思想家
(古文書学校卒)
国立図書館(パリ) 1922~1942
アルバントラス・オルレアン等の図書館 1945~(?)
(1951年 オルレアン図書館長)
20. ホルヘ・ルイス・ボルヘス (アルゼンチン) 1899~1986 詩人・小説家
市立図書館補佐員 1938~1946
国立図書館長 1955~1973
21. 沈 従文 (中国) 1903~ 小説家
北京の図書館
22. ファン・カルロス・オネッティ (ウルグアイ) 1909~ 小説家
市立図書館(モンテビデオ) 管理局長 1957~1975
23. 陳 荒煤 (中国) 1913~ 小説家
「文化大革命」のとき重慶市図書館
書庫で働かされた。
24. アンガス・ウィルソン (イギリス) 1913~ 小説家
大英博物館図書館 1936~1942, 1946~1955
25. フィリップ・ラーキン (イギリス) 1922~1985 詩人
大学図書館(複数)、大英博物館図書館
26. ヴァルター・グロース (スイス) 1924~ 詩人
詳細不詳
27. アンドリュウ・テイラー (イギリス) 1951~ 小説家
ロンドンの公立図書館 (?)~1981

IV. 図書館に勤めなかった文学者

(ここにあげる件については勤めませんでした)

1. G.E. レッシング 劇作家 (前掲III-2参照)
ベルリン王立図書館長に就任する目的で「ラオコーン」第1部を執筆(1765)出版(1766)するが、就任できなかった。
2. 夏目漱石 1867~1916 小説家 東京生まれ 東大英文科卒
「……小生……実は教師は近頃厭になり居候へども……先頃郵便にて今回若し帝国図書館とか何とかいふものが出来る様子だから若し出来たらば其へで[も]周旋して呉れまいかと中根へ申してやり候處図書館の方は牧野に面会色

々聞た處恰も松方内閣成立の始めでど
うなるものやら夢の様な話しなりとの
返答中根より到着致候まゝ其話しは今
日迄夫ナリに御座候……」

正岡子規宛書簡

明治30年(1897)4月23日付

(『漱石全集14』 岩波書店

1966 P.99-100

3. 姉崎嘲風(正治) (前掲11-4参照)

国立国会図書館創設時、館長候補とし
て衆議院からあげられた。(最終候補
が初代館長の金森徳次郎。参議院から
の候補は副館長になった中井正一)

4. シモーヌ・ド・ボーヴォワール (フラ
ンス) 1908~1986 小説家

「……父は、何をにおいても安全性のある
職業を私に望んでいた。父は、定収入
と退職金のつく公職を私に選んだ。誰
かが父に古文書学校が良いとすすめた。
私は母といっしょにソルボンヌ大学内
で働いているひとりの婦人のところへ
意見を聞きに行った。私は、カード箱
で埋まった事務室に面した、書籍がぎ
っしり並んでいるいくつもの廊下を歩
いて行った。子供の頃、私は学問の匂
いの高いこの埃の中で生きることを夢
みた。しかし今日それは聖人中の聖人
の間に入るような感じがした。婦人は、
図書館員のキャリアーの長所を語ると
ともに、その難しさも私たちに説明し
た。サンスクリットを覚えるという考
えが私を尻ごみさせた。考証学的な研
究は私の気持ちを惹きつけなかった。私
がしたかったことは、哲学の勉強をつ
づけてゆくことだった。……」(朝吹
登水子訳)

(『娘時代』 紀伊国屋書店

1961 P.145-146)

5. 林 真理子 1954~ 小説家・エッセイ
スト 山梨県生まれ 日大芸術学部

卒

「その点、うちの母親はかなり冷静だっ
たといっているだろう。なにせ彼女は、
私が小学生の頃から、

「あなたは図書館の司書になりなさい」
と言い続けていた人なのである。

「あれは一生食いつばぐれのない職業
だからね。女が一人で生きていくため
には、なにかちゃんとした仕事を持た
なければダメよ」

「女が一人」という言葉に、多少ひっ
かかったものの、私はそれでも素直に
うなずいたものである。」

(『夢みるころを過ぎて』

角川書店 1986 P.50-51)